

# 医者も知らない 平穏死



連載⑬

△長尾和宏△長尾クリニック院長。  
日本尊厳死協会副理事長。著書に  
「『平穏死』10の条件」など。

「それは十分ければ、余命は延びる  
です。」

何度もこの欄で書いていますが、病院の医師は「延命こそ、医師の使命」と考えていま

「父に食道がんが見つかりました。担当の先生から手術を勧められましたんですが、父は「手術は絶対嫌や。なんで90近い年になって、体にメスを入れないあかんねん」と……」

でも、自分の意思を表明することも自由に動くこともできず、ベッドの上で過ごす時間が少し延びることが、患者さんにとって幸せなんでしょうか。

息子さんから相談を受けました。お父さんは、風邪などで時々受診されています。

「自然体がええ」とよ分かっているんやけどおとしやってみました」と息子さん。いざも、90歳近いご高齢の希望より、の負担になるし合併症のリスクも高い。生きてほしい、寝たきりになるかもという息子としれない。認知症が進んでいる日ば近所の方が勝った晴れている日は近所の方です。仲間とゲートボールをしようです。私は、「手楽しみ、おいしいもの術後のこともが好きで、時に猥談を想像してみても、ガールフレンドも「どんな形でも長生きください」とたくさんいる今のお父さん、まったく別人は、結局、私のエゴな手術で食道のようになってしまうがんを取り除かもしれない——。つぶやいていました。

## 手術を受けて余命が延びても…



(写真はイメージ)

「お父さんは「死ぬ時ように説得してくれませんか」と、息子さんは言うのです。」